

認知症高齢者とのコミュニケーション場面における「ゆらぎ」

ーパッシング・ケアの意義に関する学生アンケートからー

荒 木 正 平

A study on the “Fluctuation” in communication with elderly people with Dementia

Shohei ARAKI

キーワード：認知症高齢者、パッシング・ケア、ゆらぎ、相談援助、アクティブ・ラーニング

1. はじめに

本研究は、筆者がこれまで進めてきた、認知症高齢者とのコミュニケーション場面において、その意思を「理解する」という営みの有する意義に関する考察の一環としてある。ただし本研究において主たる資料として用いたのは、介護福祉士養成課程に所属する短期大学生に対して実施した、パッシング・ケアの意義に関するアンケート調査の結果である。この点、これまでの筆者の研究において主な分析対象としてきたインフォーマントの属性、すなわち、(施設種別は様々であるもののいずれも)「現役の介護職員又は介護経験者」とは異なっている。

今回、調査対象となるインフォーマントの属性を、介護を学ぶ短大生に設定したことの理由は、大きく分けて二つある。まず「教育的側面」の要請にこたえる必要から、というものが第一の理由としてあげられる。近年積極的に取り組みが進められている「アクティブ・ラーニング」については、教員から学生への一方向的ではない、主体的かつ能動的で参加的な学習法であるとされ、その導入による教育的効果の向上が期待されている。介護福祉士養成課程におけるさまざまな学びの場においては、このような主体的な関わりの姿勢が強く求められる。とりわけ「介護実習」は、狭義の介護技術すなわち直接介助面での学びのみならず、インフォーマルな生活場面での相談援助が求

められることもあり、まさに「一方向的ではない、主体的かつ能動的」な態度が常に要求される学びの場である。このことに鑑みたとき、本研究は、「介護実習」を中心とした介護福祉士養成課程におけるアクティブ・ラーニングの実践に関する評価・モニタリングを目的とした取り組みとして位置づけることが可能となると考えている。

介護福祉士養成課程の学生をアンケート調査の対象と設定した第二の理由は、「研究的側面」に関するものである。すなわち、介護におけるコミュニケーションに関する問題、とりわけ、その専門性をめぐる問題について考察を今後進めてゆくにあたり、実習生という立場の有するマージナルな特性を有する者の視点からの分析を行っておくことには、一定の意義があると考えられたためである。認知所高齢者介護場面における実習生とは、純粋な介護者でも、被介護者でもない、不安定な、どっちつかずの存在といえる。そのような、まさに境界的な存在である実習生のみが有しうる視点を浮上させ、そこからパッシング・ケアの意義についての検討をさらに進めることで、これまで筆者が行ってきた、認知症高齢者ケア場面におけるコミュニケーションに関する研究に、新たな示唆をもたらしうのではないかと期待している¹⁾。

以上のような理由から、本研究では介護を学ぶ短期大学生を対象としたアンケート調査を用いての言説分析を行う。ただし、根底にある問題意識

はこれまで筆者が実施してきた一連の研究と同じものを共有している。この点についても、ごく簡単に確認しておきたい。

認知症高齢者の意思（あるいは思い）については、（物語の共同構築における権力構造といった文脈において）これまでに指摘してきたとおり、実質的には介護者主導で一方的に解釈されるケースが圧倒的に多かった²。認知症高齢者に関わる介護者が、認知症患者の「語り」を恣意的に解釈することで、そこには、「語り」の本来の主体であるはずの患者らが抱いた思いとは異なった意味が付与された「物語」が生産されていると考えられる。本研究においても、引き続きこのような問題意識を共有しつつ、学生の視点からの考察を通して、認知症高齢者ケア場面における、どっちつかずの「不安定性」や「ゆらぎ」の有する意味についての考察を進めることで、そこに発生する「違和感」や「居心地の悪さ」を軽減するための方途を探る。またその作業は、今後の筆者の研究においてケアの「専門性」を論じていくにあたり何らかの示唆をもたらし得るものとなると考えている。

2. 研究方法

本研究においては、上述の通り介護福祉士養成課程に在籍する短期大学生を対象に、パッシング・ケアの意義に関するアンケート調査を実施した。調査は2年間にわたり実施し、計2学年分のデータを収集した（回答のあった18名全員分を有効回答とした）。学生は全員が女性である。アンケート調査実施のタイミングは、短大在籍最終年度の後期開講の「人間の尊厳と自立」の授業の一環として行った。

なお、アンケート調査の実施にあたっては、学生の理解を助けるための予備学習として、同授業の講義時間を活用し、「アイデンティティ（とその喪失）」と関連付けるかたちで「パッシング・ケア」についての説明をごく簡単に行っている。説明後にも不明な点などは質疑応答を行い、一定程度の学生の理解を得られたと確認・判断したうえで、別添1「配付資料」³を学生に配付し読んでもらった。別添1の資料には介護職員2名の語り

を掲載している。一人目は、認知症高齢者ケア場面におけるパッシング・ケアの活用に肯定的なスタンスでコミュニケーションにあたるA氏である。二人目は、自身の採るべき態度について悩みつつも、事実を提示するケアの実践を行うB氏である。別添1の配付後にも質疑応答の機会を設けるなど、学生が十分に理解するまでの時間を確保したうえで、別添2「アンケート回答用紙」を配付し、自由記述形式で回答してもらった。

3. 重要語彙の確認

本研究におけるキーワードである「パッシング・ケア」について、ここで確認しておく⁴。

介護現場のコミュニケーション場面で広く用いられるテクニックに、「パッシング・ケア」と呼ばれるものがある。これは、社会学者のゴッフマンにより用いられたパッシング（passing）概念⁵をもとに、同じく社会学者の出口泰靖により構想された用語である。出口によると、それは

「呆けゆくこと」に気づいている周囲の者が、まるで本人が「呆け」てはいないかのように振る舞う文脈をつくりだす（出口〔2004：166〕）

ことを前提としたケア手法とされる。認知症高齢者の症状に気づいている周囲の支援者らが、まるで本人が認知症ではないものとしてふるまう関係形成上のテクニックである。認知症高齢者への「配慮のケア」とみなされることが多い（出口〔2004〕）。本稿においても、この出口による定義を用いることとする。

4. 学生アンケートの結果より（抜粋）

上記の手順により収集したアンケートの結果は、別添3・4に示したとおりである。掲載したデータについては、ほぼ回答にあった原文のままであるが、学生あるいは関わった利用者の個人情報に深くかわるものや、本論の趣旨と関連性をもたないと思われる箇所については最低限の添削修正を施している点ご了承ください。なお各データに便宜上付した通し番号は無作為のものであり、

学生番号との関連性はない。また、別添3・4はそれぞれ別個に通し番号を付しているため、3・4資料における通し番号の重複は、同一の回答者を指すものではない⁶。

4-1. 設問①「『パッシング・ケア』に関する学生の意識について」回答結果⁷

まず設問①への回答結果から確認していく（別添3参照）。上述のとおり、学生には事前学習の機会を提供し、別添1の資料を読んだうえで自身のパッシング・ケアへの意識を回答してもらっている。資料にあるA氏とB氏の語りを参考にしつつ、自身が認知症高齢者ケアの場面にどのようなスタンスで臨んでいるのかについて分析した。結果、回答のあった全ての学生が真摯にかつ反省的に振り返りを行っていることが読み取れる。

回答結果からはまず、多くの学生が判断を保留したり、逡巡していることがわかる。たとえば学生14（「利用者側だったら言ってほしい」「でも介護者側に立つとまた違うのかな」）や、学生9（「どちらの意見も「確かにそうだな」「分かるな」と思った」、「難しい問題だが、その方に合わせた支援ができればいいと思う」）などがある。学生9のようにA氏・B氏のいずれの態度も正しいものであるとするスタンスをとっている学生も多い（他に、たとえば学生6など）。

また、適切な対応は利用者や状況に依存するもので一概にどちらが正しいとは言えない、としているのが、学生3（「利用者さんによるのではないか」）や学生11などである。

そのほか、学生1（「その方を傷つけない嘘であるのならば」、「そのことで本人が毎日幸せに暮らせるのならば」）や、学生2（「ある程度行った方が良い」、「事実を伝えることも大切なことだとは思いますが」）、学生4（「どちらが正解というのはないと思いますが」）などの回答にあるように、パッシング・ケアの活用にやや肯定的とみられる学生についても、そこには必ず別様の対応を行いうることへの余地を残した回答となっている。

学生18については、もっともパッシング・ケアの活用に関心がある回答であるといえる。この設問

①への回答のみからは、事実を提示するケアとのあいだでの「迷い」や「ゆらぎ」が最も読み取りにくい。設問②への回答からは、彼女の場合にもまた、二つのケア手法の間に「悩む」場面が生じていることがわかる。次項にて確認したい。

ここでの学生達の回答からは、認知症高齢者をケアする上での彼らの意識における、ある特徴的な傾向性が読み取れる。それは、パッシング・ケアが正しいとも、逆に、事実を伝えるケアが正しいとも、はっきりと態度を決めることはできないという気持ち、どちらかの態度のみに完全にくみすることへのためらいの思いが（逆説的ではあるが）明確に示されているということである。上記確認してきたとおり、学生によってその表現は若干異なるものの、パッシング・ケアか事実を提示するケアか、といった形で自身の態度を固定化することへの「ためらい」や「ゆらぎ」の感覚は全員が有していたといえる。

4-2. 設問②「実習中のパッシング・ケア実践場面（見学含む）について」回答結果⁸

続いて、設問②への回答結果をみてゆく（別添4参照）。しかし、その前に一点確認しておく必要がある。それは、本設問であるパッシング・ケア実践の発生場面に関する解釈の修正についてである。本アンケート調査を実施するにあたっては、当初「実習中の」場面におけるパッシング・ケア実践を想定していた。だが、回答中の学生から「自身の個人的な経験を記入することも可能であるか」という趣旨の問いかけを受けることが何度かあった。そのため、検討の結果として、「実習を含む」ものとして拡大解釈を可とすることとした。これについては、学生それぞれがパッシング・ケア実践に関する理解を深めた結果、本設問が、自己のかつての経験を振り返る契機としての意義をもつに至ったものと解釈することができる。であるとするならば、まさにこの場面は、学生が自己の学びを主体的に深化させるモメントとして解釈することも可能であり、肯定的に評価してよいだろう。具体的には、学生11（「隣に住んでいるおばあちゃん」）の事例と、学生18（「同じ話をする

ことがある父に対して初めてきいたような対応をする」事例がこれにあたる。

回答結果の確認に戻ろう。まずは、設問①でも触れた学生18（＝設問②における学生12）の事例についてみておこう。詳しくは触れないが、この学生の父親は血管性認知症（母親が主介護者としてかかわっておられる）とのことであった。彼女は、「同じ話をすることがある」という父親との関わり合いの場面において、「同じ話をしている途中に父自身が、「あれ？この話したかな？」とたまに言うことがあり、私は「うん」と言うべきか悩むが「ううん」と答えてしまう」との回答が得られた。この場面においては、確かにパッシング・ケアが実践されている。設問①では、パッシング・ケアと事実を提示するケアの間での「ゆらぎ」が確認しづらかった彼女であるが、ここでは対応に「悩む」自身の思いを明確に表現している。

次に学生5の回答においては、職員と複数の利用者とは集う場面で、「優しい雰囲気」で実施されたパッシング・ケアにその意義を見だし、「パッシング・ケアも大事なのでは」との思いに至る過程が確認される。

しかし一方で、学生6の回答（「ずっと同じことの繰り返しやけんほっといて良いといわれほっとくように指導された」）からは、職員によるパッシング・ケア実践の文脈からの離脱、それはおそらく、事実を提示するケアといった意図をもった離脱とは異なる、十分な配慮に欠けたものとしての離脱のリスクが示唆された。

また、学生8の回答では、学生6が立ち会った場面とは逆方向のリスクの存在が確認されている。ここで取り上げられているのは、ぬいぐるみを自身の子供と認識されている利用者に対し、職員たちはその「言動を否定されることはなく、「子供を連れていく」と言われた時はクマのぬいぐるみを背中に乗せてあげて」いたというパッシング・ケア場面に関する記述である。しかしこの利用者は、「まだら認知症の状態がみられ、認知症とは思えないようなしっかりした受け答えをされる時も」あるにもかかわらず、「ご本人が言ったわけでもないのに職員さんがブランケットを持って来

て、「赤ちゃんを背負っていたらどうですか」と言って肩にかけていた」ため、学生はその職員の関わり方について、「違うと思った」と語り、違和感を表明している。これはまさに、パッシング・ケアのルーティン化⁹のリスクが表出した場面であり、同時にまたそのことを学生が正しく感受した場面であると言える。

最後に、パッシング・ケアと善意の嘘の関係性についても述べておく必要があるだろう。たとえば、学生2の回答には、「食事を拒否される方に対して息子さんが持ってきた物、といい食べてもらっていた」とあるが、これがパッシング・ケアとよべるものであるかどうかの判断は難しい。この場面について、「ただ単に食事をとっていない」という事実のみを取り上げると、そのことと認知症であることとがどのように結びつくかは見えてこない。その意味では、この場面は（認知症高齢者へのケア手法としての、狭義の）パッシング・ケアには含まれない、（より広義の、ケア場面全般に適用可能な）「善意の嘘（フィクション）」の一つであるかもしれない。ただし、ここでの食事拒否の理由が、認知症に起因するものであればどうか。その可能性も否定できないであろう¹⁰。

5. とともにゆらぎ、逡巡すること

以上、認知症高齢者ケア実践場面におけるコミュニケーションについて、学生アンケートの結果から分析を進めてきた。筆者がこれまでの研究で明らかにしてきたとおり、そこでの介護者は、パッシング・ケアというケア手法と、事実を事実として提示するケアという、二つのケア手法の狭間におかれることを余儀なくされている。しかし、今回アンケートに回答してくれた学生＝実習生は、介護者・被介護者が共有する〈場〉とともに立ちあいつつも、自らはそのいずれでもないという、介護者よりもさらに不安定でマージナルな存在である。そのような「どっちつかずの」特性を有する学生＝実習生としての立場からのみ可視化される景色があるのではないかと考え、本稿ではそこに焦点化して彼らのパッシング・ケアに関する意識のあり方について検討を行った。

検討の結果、明らかになったのは、自身の態度を固定化することへの「ためらい」や「ゆらぎ」の感覚を、回答した学生の全員が有していたという事実である。この結果は、見方によれば、学生達はどっちつかずの回答に終始しており、認知症高齢者ケア場面での適切なふるまい方について何も学んでいないようにも思われるかもしれない。しかし、それはむしろ逆であろう。彼らは、ケアの場面においてゆらぐこと、逡巡すること、戸惑い、振り回されながらも場をともし、(それでもなお必要とあれば)ともに「(何らかの) 答え」となる落としどころを見つけてゆくことの難しさや大切さを学んでいるのである。そのように考えると、実習を含むこれまでの学習の結果が、上記のアンケートへの学生の回答にも正しく反映されているとみることもできる。

さらに言えば、そのようなコミュニケーション場面は、実習生としての学生自身の存在がまさに証明している通り、常に介護者―被介護者間の一対一関係で結ばれるシンプルな構造でなされとは限らないという困難性も孕んでいる。家族や関係者のみならず想定外の第三者の参入なども含む、多様な「他者」の介在を受けるかたちで自然発生的に形成される、インフォーマルな生活場面における相談援助の場となることもあるのだ。そのような〈場〉においては、一対一関係で固定化した支援の方法論が―それ自体の意義や有効性とはまた別の次元の問題として―いつでも有効ではありえないだろう。

すでに記載した通り本稿においては、またこれまでの筆者の研究においても、認知症高齢者ケア場面における「違和感」や「居心地の悪さ」を軽減するための道筋を見出すことを重要な目的の一つとしてきた。その目的あるいは問題意識については、現時点でも十分な根拠のあるものであり、重要性をもつと考えている。しかし、本稿での検討を経たいま、認知症高齢者ケア場面に存在する「違和感」の在在については、もう少し詳細な分析が必要となるとも考えている。それはつまり、そこにある「違和感」を、端的に不要なもの・縮減していくべきもの(時間的・空間的に不適切に

設定された〈場〉のあり方により発生している一時的違和感)と、適切に向き合うべきもの(すなわち、認知症高齢者が生きる世界と〈われわれ〉が生きる世界とのズレを感受することによる二次的違和感)と、に切り分けていく作業である。

このうちの前者、すなわち不要な「違和感」や「居心地の悪さ」の原因として考えられるもの、例えばそれは、生活歴を無視した生活環境であったり、余裕を持った対人ケアを行うことが困難な人員配置であったりするのではないだろうか。これらについては、その一つひとつを具体的に縮減していくことが求められるであろう。そして、この「一時的違和感」の縮減により、後者の「二次的違和感」と適切に向きあえる状況を作り出すことが可能となるのではないか。どのように環境を整えても、認知症高齢者ケアの現場においてこの「二次的違和感」は不可避免的に発生する。であるとすれば、そのような「二次的違和感」に対しては、その縮減を目指すのではなく、認知症高齢者ともに「ゆらぐ」こと、ゆらぎつつ、逡巡しながらも、ケアを必要とする者と共同での物語構築に参入すること、またそのことが可能となる時間的／空間的な〈場〉を確保することが求められているのではないだろうか¹¹。

ケアの場面において、「ゆらぐ」ということ自体は不可避である。であるとすれば、介護者(あるいはより広義のケア実践者)として、被介護者(被ケア者)とともに「適切にゆらぐ」ことに、積極的な意味があるとは考えられないだろうか。紙幅も限られており、ここからケアの専門性の検討に立ち入ることはできない。しかし、「ゆらぐこと」や「戸惑うこと」、「振り回されること」といった、一見すると「専門性」とは対極の「素人性」とでも呼ぶべき特性にこそ、ケアという行為に固有の存在意義が見出される可能性が存在すると思われる¹²。この点については、今後の課題としておきたい。

注

¹ 本稿の結論にも関わるが、介護実習生の有する「境界性」「未完性」や、途上であることの積極的意義は、

- 介護（介助）労働に既に携わる者においても同様に見出される。これに関連したところでは、身体障害者の介助に関する問題について論じた前田〔2009〕を参照されたい。
- ² 荒木〔2014〕〔2015〕〔2017〕等参照のこと。
- ³ 配付資料に使用したデータは、筆者が2006年から現在までに、認知症対応型共同生活介護（グループホーム）の他に軽費老人ホームや特別養護老人ホーム等を含む介護職員または介護経験者を対象に実施した、直接面接（半構造化面接）方式インタビューにより得られたデータからの抜粋である。
- ⁴ 荒木〔2017〕等と重複するが、本稿においても極めて重要な語彙となるため改めて確認しておく。なお、物語／語りについては、荒木〔2017〕等における説明を参照のこと。
- ⁵ 「まだ暴露されていないが、〔暴露されれば〕信頼を失うことになる自己についての情報の管理／操作、簡単にいえば、〈パッシング〉（passing）」と説明されている（ゴッフマン〔1963＝1970：81〕）
- ⁶ 別添3における学生18が別添4における学生12であることのみ、本人確認・了承を得てここに記しておく。
- ⁷ なおこの設問については、回答のあった18名の学生全員分のデータを掲載している。
- ⁸ この設問については、学生および利用者の個人情報保護の観点等から、回答のあった学生18名中12名分のデータのみ掲載している。
- ⁹ 荒木〔2015〕参照のこと。
- ¹⁰ たとえばこのとき利用者は、「私は家に帰らないといけないのに、わけもわからず知らない場所に引き止められている。さらには誰がつくったかもわからない食事まで食べるように勧められた。私は自分の食事は自分で準備できるし、人に施しを受ける義理などない！」と考えている可能性はないだろうか？
注5に確認される通り、そもそものゴッフマンによる〈パッシング〉（passing）定義に、認知症高齢者が使用するものという含意は存在しない。このことは、認知症高齢者を対象に限定した「パッシング・ケア」の概念と、ケアと称される行為が発生するあらゆる場面において見出される、「善意の嘘（フィクション）」による物語世界の構築との関係を整理し直す作業の必要性を示唆している。その作業は、ケア行為の専門性をめぐる考察にも重要な意味を持つと考えられるが、この点については稿を改めて検討したい。
- ¹¹ 対人援助者の「ゆらぎ」の意義や課題に関する考察としては、尾崎編〔1999〕等がある。
- ¹² これについては、石橋〔2006〕からの示唆が大きかった。参照されたい。

〈参考文献〉

- Anderson, H. & Goolishian, H. 1992, The Client is the Expert: A not-knowing approach to therapy. In McNamee, S. & Gergen, K. J. eds. (=1997「クライエントこそ専門家である」野口裕二・野村直樹訳『ナラティヴ・セラピー：社会構成主義の実践』金剛出版)
- 荒木正平 2014 「派生的暴力としての認知症高齢者のカテゴリー化 ―介護者の「語り」を手がかりに―」『文化環境研究』7. pp. 30-38。
- 2015 「認知症高齢者による「物語」の構築プロセスに関する考察」『長崎女子短期大学紀要』39 pp. 45-51。
- 2017 「認知症高齢者の意思の「理解」をめぐって」『長崎女子短期大学紀要』41 pp. 64-70。
- 出口泰靖 2004 「『呆け』たら私はどうなるのか？何を思うのか？」山田富秋編『老いと障害の質的社会学——フィールドワークから』世界思想社 pp. 155-183。
- Goffman, E. 1963, Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity: Prentice-Hall. (=1970 石黒毅訳『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房)
- 石橋潔 2006 「専門職化によって形成される専門領域と非専門領域—その理論的枠組み—」『久留米大学文学部紀要 情報社会学科編』2. pp. 35-46。
- 京極重智 2014 「「子ども」と「認知症高齢者」を結びつけるものとしての「パフォーマンス」：介護等体験において生じうる体験を端緒として」『大阪大学教育学年報』19. pp. 3-15。
- 前田拓也 2009『介助現場の社会学——身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ』生活書院。
- 三井さよ 2012 「〈場〉の力——ケア行為という発想を超えて」『ケアのリアリティ——境界を問いなおす』法政大学出版局 pp. 13-45。
- 西川勝 2007『ためらいの看護 臨床日誌から』岩波書店。
- 野口裕二 2002 『物語としてのケア——ナラティヴ・アプローチの世界へ』医学書院。
- 奥村隆 1998 『他者という技法——コミュニケーションの社会学』日本評論社。
- 尾崎新編 1999 『「ゆらぎ」ことのできる力——ゆらぎと社会福祉実践』誠信書房。
- Anderson, H. & Goolishian, H. 1992, The Client is the Expert: A not-knowing approach to therapy. In McNamee, S. & Gergen, K. J. eds. (=1997「クライエントこそ専門家である」野口裕二・野村直樹訳『ナラ

【別添1】

『人間の尊厳と自立』 第〇回 配付資料

○パッシング・ケアについて

①＜介護職員 A さんによる語り＞

A：あの一、ほら、あの一、G さん（＝介護職）がよかったやんね、「あなたたちは脳の病気で・・・」って、

荒木：うんうん

A：ああいう悲しい告知はせんでもいいと思うの私は。そら、ほんとのことだよ、ほんとのことだけど、それをいったところで、悲しくどーんと、落ち込ませたところでね、何か、生まれるのかなって思う。こう、だからここにいますよ、だからここに預けられてるんですよっていうのを、だ、そんなの聞いたら誰でも悲しいじゃない。

荒木：うん

A：「あら、私はそうなんだ」って、五分後に忘れるとしても、少なくとも聞いたときは、どーんとショックやんね。残り少ない人生でそんなしょ、衝撃な、事実を話してもね、あんまり残るものはないと思うのね。

荒木：うん

A：それなら、嘘、ね、そりゃ、罪悪感はもちろんあるけど、嘘、はすごく大事なこと。だけん〔帰宅願望を繰り返される〕青山さんに、もう、もうほんと毎日毎日嘘ついて、「今、ご家族さんのあそこまで（迎えに）来とるげな」とか、もうほんと罪悪感生まれるけど。「帰れないですよ」っていったところで納得するはずもないし、

荒木：うーん

A：だけん、事実を伝える、ときは大事なんだろうけど、悲しい事実は、いらないと思うな。

②＜介護職員 B さんによる語り＞

荒木：ちょっと説明したほうが楽になるんじゃないかとかた例えば・・・

B：けん、私言うたことがある気がする。

荒木：あ、ほんとですか。

B：青山さんにも言うたことあるかもしれん。（略）「身体が衰えるとおんなじで脳も衰えていくけん」って。「考えよったことができなくなったりとか、もうそれはみんななることやし自然なことやから」っていう話しは赤川さんにもしたって思う。それが持続できんっていうね、その、そのとき納得したっちゃもうそれは忘れてしまう。それが決して傷つけるためにもいいやらんし、私あんまりごまかさんとたい基本的に。（略）まあ、だからどっちがどうかわからん。あんまりごまかしたフィクションの世界を作り上げるのがベストっていう感覚があんまりないからね。（略）だから、どっちがいいか悪いかはわからんというか、向こうにとってはごまかされた世界の方が居心地がいいのかもしれない。けど、安心する人もおらしたよ。こう一所懸命やって説明するやん。わざわざわからん人になっていわれても説明してなんとなく落ち着かしてまた忘れてって、いう話しはようあったけんね。青山さんと話しよったって、2時間くらいかけて結局、話が頭に戻ったりとかするばってん、なんか落ち着かれるっていうのもあるけんね。そういうばかりじゃなかばってん。

i 入所者の青山さん（仮名）は、80歳代後半女性（インタビュー当時）。

ii 入所者の赤川さん（仮名）は、80歳代前半男性（インタビュー当時）。

【別添2】

人間の尊厳と自立 第〇回（アンケート回答用紙）

番号

氏名

①アイデンティティ操作としての「パッシング・ケア」について、あなたはどのように考えますか。資料(※＝【別添1】を指す)も参考に、自由に記述してください。

②これまでの実習で、あなたがパッシング・ケアを実践した、あるいは他の職員や家族がパッシング・ケアを実践していたと思う場面について、具体的に記述してください。

【別添3】

	①アイデンティティ操作としての「パッシング・ケア」について、あなたはどのように考えますか。
1	パッシング・ケアはとても有効的であると思います。多少の嘘などもつかなくてはいけなくなるので、罪悪感はあるかもしれませんが、相手を傷つけることは無いと思うので良いのではないのでしょうか。Aさんとの会話の中にもあるように、悲しい告知は本人にはわざわざしなくて良いと思います。その方を傷つけない嘘であるのならば、私はついても良いと思います。そのことで本人が毎日幸せに暮らせるのならば。伝えてもすぐに忘れるかもしれないけれど、聞いたその瞬間はきっと悲しいから。
2	情報の操作はある程度行った方が良いと思う。嘘をついた方が有効な場面も見られると思うので、嘘をつくことも大事だと思う。事実を伝えることも大切なことだとは思いますが、衰えていっているのは本人が一番分かっていると思うし、わざわざ、傷を大きくするような事実は言わなくて良いと思う。
3	A職員さん、B職員さんの両方読んで、「利用者さんによるのではないかと」思いました。事実を伝えて、ドーンとショックを受ける利用者さんには、Aがいかかもしれないし、事実を（みんななるとやわらかく）伝えることを望む利用者さんもあるかもしれないし、パッシング・ケアの方法は利用者さんの数だけあるかもしれないと思いました。
4	私は「パッシング・ケア」も時には大事だと思いました。Aさんの語りのように、罪悪感はあるかもしれませんが、その方にとってもそっこのほうが良いことはあると思います。説明して落ち着くことがあってもまた次の時には忘れるので確かにどちらが正解というのはいないと思いますが、その方によって説明したほうが落ち着く人であれば、嘘をつくことで落ちつかれる方もあると思います。その時の感情や思いを大事にすることが大切だと思うので、1つのケアの方法として「パッシング・ケア」をすることも必要だと思いました。
5	2つの事例を読んで、Aさんは、嘘でもいいから、事実は伝えずに、利用者さんを悲しませないようにして、Bさんはすぐに忘れてしまっても、事実にはショックを受けたとしても、本人には本当のことを伝えるようにしている。実際には、よく現場で見られる場面ではあるが、とても難しいことだと思った。一概にこう！ということとはできないが、その人その人に合わせた接し方で、真実を伝えなきゃならない人、嘘をついても落ちついてもらわなきゃいけない人があると思う。その時の状況やその人の状態も大きく関わってくると思う。
6	Aさん、Bさんの意見はどちらも正しいと思います。ただ、どちらかといえば自分はAさんの考えに近いと思います。必要なときに事実を伝えることはもちろん大切なことですが、わざわざ毎日「あなたは病気のことで全て忘れていきます。」と言って傷つけることにあまり意味がないように思うからです。うそをつくことが正解だとは思いますが、なるべく平和に毎日を過ごしていただくことが大切なのではないかと思えます。
7	良く「パッシング・ケア」について分かりませんが、相手が受け入れたくない心があるからそういうなっていないような文脈を作るのではないかと。また、本人の気持ちも考えているつもりで言っているのではないかと。A・B考え方は違うが利用者のことを行ったケアを行おうとしているのは変わらないと思う。
8	今までの実習ではAさんの対応をしている方がほとんどだった。その時に落ち着くのなら、悲しい思いをさせない方がよいのではないか、嘘をつくことは悪いことだが、とても大事なのではないかと。しかし、Bさんのかかわりも間違っているわけではないと思う。利用者さんとコミュニケーションがとれて信頼関係が築かれている中でのBさんの対応ではないかと思う。介護福祉士として長年勤務してきた人の「かん」のようなもので、ここで本当のことを言った方がよいと判断できるのではないかと。全てにおいて嘘をつけばよいのではなく、ある程度は本当のことを言う。そのことで利用者さんがどのような様子になれるか。それが判断できるようになりたと思う。
9	どちらの意見も「確かにそうだな」「分かるな」と思った。（A）認知症だと伝えられて、悲しませたりするのは嫌だし、それで生きるのが辛い、意欲がなくなるのも良くないことだと思う。その方が安心されるのであれば、嘘はよくないことであるけれど、場合によっては大切なことなのかもしれない。その方が生きていく上で、残りの人生を楽しく生きていただくためにすべき支援ができればいいと思う。（B）逆にBは認知症について説明をしていて、本人が苦しくならないよう、不安にならないような声かけがされており、認知症だけでなく普通だと思えるような声かけであると思う。説明をして安心する方もおられるのであれば説明してもいいと思う。難しい問題だが、その方に合わせた支援ができればいいと思う。
10	パッシング・ケアにあたって、するかしないかや、どのようにするかは、相手によって一人一人違ったものとなると思います。自分自身の価値観でした方がいいとか、しない方がいいと決めるのではなく、ご利用者一人一人をよく見、よく知ることによって、パッシング・ケアが必要な人と必要ではない人がいると思いますし、必要ではないと思われた人であっても、状況に応じては必要な場合が出てくることもあるかと思う。ケアをするにあたって、職員一人一人も考え方や価値観は違うと思いますが、一人の利用者に対してパッシング・ケアをする職員としない職員が出てくるとご利用者が混乱すると思うので、しっかりカンファレンスを行い、ケアの統一をすることが大切だと思います。
11	利用者さんに嘘をついて、ごまかし続けるのは、良いとも思わないし、色々正直に言い過ぎてても良いとは思わないので、どちらがいいのかは、分からないけど、このプリントを見て思いました。なので、介護職員は、家族にはしっかり事実を伝えて、利用者さん本人には、その方の状況に合わせて、上手に、嘘と真実を使い分けて接していかなければならないと思いました。
12	パッシング・ケアを行っても大丈夫な方、そうでない方がいると思うのでその方によってこのケアを行うか考えると思います。できれば、ウソは言いたくないと思うけど、言ってしまうかもしれません。でもその方の世界観の中に合わせた言葉で対応することが、その方が落ちついたり喜んだりしてくれて満足してもらえるならウソではないのかなと思います。
13	「パッシング・ケア」もそうでないケアもどちらかが「絶対的に正しい」ということはないのではないか？それぞれの介護者のやり方があっても良いのではないかと。どちらも度が過ぎない程度に相手のことを思いやる気持ちがあるのが前提なら良いと思う。でも、自分でもうすうすわかってる認めたくないことを他人から言われたら傷つくと思うので、そういう点は配慮が必要だと思う。
14	自分がこういう立場になったら利用者側だったら言っていたらよかったなと思った。自分はこういう病気なんだって知つきたいから。でも介護者側に立つとまた違うのかなと思う。利用者が聞いて落ち込んでしまった時に対応の仕方が分からなくなりそうだし、ああ言わなければって後悔しそう・・・
15	資料を読んで、はっきりと言われることは悲しいと思うけど、すぐに忘れてしまうこともあると思うと、きちんと説明した方がよいのではないかと。ショックはうけるだろうけど、自分に何が起こっていることをあいまいにはしてほしくはないと思います。でもそれが嫌な人はいないと思うから、利用者の方をよく知ることが大事だと感じました。パッシング・ケアを使うときと、使わないときを分けられたいと思います。常に、しないではなくて、状況に合わせてケアすることがいいのかなと思いました。
16	すぐに忘れてしまうからといって悲しい事実をいった所でショックをあたえてしまうと思うけど、事実を話すことによって落ち着かれたり、安心する人もいますのでAさんの意見もBさんの意見もどちらも正しいと思いました。
17	本当のことを伝えるのも大事だけど、その人が今生きている世界というのを大切にもしたいので、嘘をついたり、その人の世界に合わせるのには良いと思いました。
18	認知症の方の対応として「パッシング・ケア」は必要だと思う。「パッシング・ケア」を行う職員の方は大変な部分もあると思うけど、利用者の方が楽しそうにしているのに本当の事（例えば同じ話など）を言って傷ついてしまうこともある。「知らなかった方が幸せ」というのも沢山あるが、「パッシング・ケア」は「あえて言わないようにする」という思いやりだと思う。利用者が嫌な思いをしないで過ごせるには必要な対応だと感じた。

【別添 4】

	②これまでの実習で、あなたがパッシング・ケアを実践した、あるいは他の職員や家族がパッシング・ケアを実践していたと思う場面について、具体的に記述してください。
1	認知症の方に「私どこおかしい？」と聞かれ、私は「どこもおかしありませんよ」と伝えた。するとその方は「うわー嬉しい！！」と喜ばれていました。その様子を見た時に私はボケていることを伝えることは絶対にしたくないと思いました。また、「私はボケ老人やけん。ごめんね。」と言われる利用者の方に職員の人は、「ボケとらん。ボケとらん。」と毎回伝えており、利用者の方もにっこりと笑顔になられていた。実践して、嫌な気持ちになった人はいないのではないかと思います。
2	・認知症があり、自分は生まれ故郷にいてと思っている方がいた。そのことを否定するのではなく、受け止め、その土地に関する話を一緒にされていた。 ・帰宅願望がある利用者に対して、「バスが来るまで待って下さい。」と言い納得してもらっていた。 ・認知症があり、食事を拒否される方に対して息子さんが持ってきた物、といい食べてもらっていた。息子さんが持って来たと言わなければ食べて下さらないので、この対応はよいと思った。
3	「私は何ばしたらよかとかわからんとよ。もうすぐお昼とに・・・」と認知症の方が言っているのに対し職員さんは、「ゆっくりしとってよかとですよ、大丈夫です」とやさしく答えていたが、なっとくしておられないようすだった。私にも同じ事を言ってこられたので、「もうすぐお昼です、何をしたいですか？」とたずねると、「お昼やけん、ごはんの準備ばせんばでしょ」と言われた。「お昼ごはんは、みんなの分、調理の方が準備してくれるそうですよ」と伝えると安心されたように座って過された。という場面がありました。その人が何を求めているかだと思いました。
4	実習の時に、毎日毎日、帰宅願望の強い利用者さんがいて、スタッフの方は、毎回、「今日はお泊りよ」や「息子さんは忙しいけん、ここにおらんば」と言っていたが、その時は納得しても、すぐに忘れて同じことを繰り返していた。その度、周りのスタッフ、利用者、私などが、声かけを行っていた。不安そうな顔をして「帰りたい」との訴えが多かったが、息子さんが面会に来ると、とても楽しそうに「ここは楽しい、ご飯もおいし」と言われていた。不安や帰りたいという思いだけでなく、もっとその人が笑顔で楽しく過ごせる時間を増やしていける支援ができるようになりたいと思った。
5	施設でおしほりたたみをしている女性の方たちのなかに一人、しかたを忘れられている方がいました。職員さんはその方に「ダメよ、お母さん。忘れたフリしてサボろうとしちゃ！」と笑って話しかけていて、利用者さんも笑いながら、となりの方がしているのを見ながらされていました。その優しい雰囲気を出して、パッシング・ケアも大事なのではと思いました。
6	1人の利用者の方が帰宅願望が強い方だったが、職員の方は利用者の方に〇〇〇さんが迎えに来るけん待ってね ごはんば準備しとらっさんけん食べてから行きましょと声かけをしていた。しかし、もう1人の職員の方はずっと同じことの繰り返しやけんほっといて良いといわれほっとくように指導された。
7	これまでの実習で、利用者が「私ボケとるとよ、大丈夫かな」と言われたので私は、「まだまだ大丈夫ですよ、そんなに心配しなくて」と伝えた。私は、その時どのような声かけをするべきなのか、「ボケてますね」のような言葉はだめだろうと思い、「大丈夫ですよ」と言った。その方の状態を見て、不安になりそうなら、「心配いらない」と言っていいたのではと思った。不安になるよりは、プラスに考えた方がいいと思う。「ボケている」ということを感じさせない、それでもいいんだと思ってもらえたらいいなと思いながら、実習で利用者様と関わらせていただいた。状況や場合にに応じてパッシング・ケアというものは、いいものだと思う。
8	実習で担当させていただいたA氏のぬいぐるみを背負っていることに対して、子供として接したその時の状況。その頃のA氏に対しては、フロアの職員さんもA氏の言動を否定されることはなく、「子供を連れていく」と言われた時はクマのぬいぐるみを背中に乗せてあげていました。しかし、A氏はまだら認知症の状態がみられ、認知症とは思えないようなしっかりした受け答えをされる時もあり、ご本人が言ったわけでもないのに職員さんがブランケットを持って来て、「赤ちゃんを背負っていたらどうですか」と言って肩にかけていたのは違うと思って見ていました。
9	レクで、習字をしている時に、「夏」という漢字がなかなか出てこず、違う紙に書いて教えると利用者さんが「私は、もう頭がボケとるけんね」と言ったので「いいえ、全然〇〇さんは、お元気でしっかりしておられますよ！」と伝えると笑っておられた。
10	昼から夕方帰宅願望がある方で、「タクシーを呼んで。来てるから家に帰ります」といってフロアを歩き出しました。歩き始めたら少し一緒に歩いて、「タクシーが来るまでイスで待ちましょか？」と声をかけて座って「家に帰るんですか？」と聞くと「ご飯を作る」と答えるので「何を作りましょか？」と違う方へ会話をしていきましたが、また「タクシーが」となったので同じことをくり返しましたが、次はごはんではなく洋服とか利用者が興味を示すものについて会話をした。「タクシーは来ません」とは言えなくて「まだ来ないですね、遅い」と言うしかできませんでした。
11	隣に住んでいるおばあちゃんが夕方5時くらいにリュックを背負って1人で歩いているのを見かけました。今までは夕方に買い物に行くのを見たことがなかったし、認知症だと分かってからは必ず息子さんとお出かけしていたので、不思議に思って声をかけました。「買い物に行ってきたのよ」と言われたけど、家とは逆方向に行っていたので一緒に帰ることにしました。リュックは小さく買い物の袋も持っていないかったけど、何を買ったのか等を聞いて、はなしをしました。
12	同じ話をするところがある父に対して初めてきたような対応をする。これは施設でもよくあることで、実習に行った時に認知症がひどい利用者さんとは、毎朝自己紹介を行い一日をスタートすることが多かった。調子がよいのかわからないけど覚えてる日もあり、その時はありがとうとんでか答えた。父との会話で、同じ話をしている途中で父自身が、「あれ？この話したかな？」とたまに言うことがあり、私は「うん」と言うべきか悩むが「ううん」と答えてしまう。やはり父には、いつまでも話をしてほしいと思うし、“何回も同じ話をしているかも”という不安を一瞬でも感じてほしくないと思っているからです。